ネイチャーセンター ガイド (104)

「カブトムシとわたし」

カブトムシといえば夏の風物詩、子どもたちのアイドルのような夏の生き物。かつて私もカブトムシを求めて森の中をさまよったことを夏が来るたびに思い出す。しかし今は、別な意味でなつかしく思い起こしている。

朝4時、ランニング、短パン、ビーチサンダルすがたに網、虫かごを持ち、自転車に乗りカブトムシポイントに兄貴と二人で向かっていった。お盆に入るまで毎日のようにこの活動は続いた。なんでこんなにもカブトムシに執着していたのかは未だに分からないが、きっと「成果」と「競争」が融合し、私たちにマッチしていたからと勝手に解釈している。

「成果」とは、カブトムシを採るということ、カブトムシを買いに来てくれる農協の叔父さんがいてくれたこと、売ったお金で自分たちはお小遣いを得られた。そのお金で当時50円のアイスや100円のジュースを買っていたことにあると思う。カブトムシを籠に入れ、眺めていたり、相撲をしたり、カブトムシといる時間の「ワクワク感」が今でも忘れられない。この見えない感覚がたまらなかったのだと思う。

また、1分でも遅れるならば、カブトムシは他の人の手に渡ってしまう。誰が採っても恨まない、奪わない、そんな暗黙のルールも教わっていた。「競争」の世界でもあった。そして、ポイントは誰にも教えない。私は兄貴に教えられた。兄貴は誰に教わってきたのか？ そうだ、いとこのお兄ちゃんだ。ポイントでは、仕掛けな

んてしたことはない。樹液に群がるスズメバチ、ガ、チョウ、コガネムシ、カブトムシ、ノコギリクワガタ、ミヤマクワガタ。樹上にいるカブトムシは樹を蹴飛ばして落とす。音で何が落ちたかが分かるくらいに感覚は研ぎ澄まされていた。この方法も兄貴に教わった。そして里山は体当たりで付き合ってくれていた。容赦なく、こんがり焼けた肌に傷をつけていった。これもまた感覚を研ぎ澄ました。

夏休みは子どもたちの感覚を研ぎ澄ます絶好の機会。幼少のころの里山や川での痛い、楽しい、うれしい、失敗、汚れる、生き物に触れる、見つける経験は確実に必要なこと。なぜなら「脳の感覚」を刺激してくれるから。そしてその刺激された感覚は、一生、記憶に残り、研ぎ澄ますことをやめない本能を呼び起こさせる。研ぎ澄ます喜びを自分に与え、経験から得た感覚は生涯、磨き続けていくのです。

子どもたちは今、この喜びを大人たちの手で味わえないでいます。水溜りで泥んこに、お手伝いのつもりがいつの間にか遊びに……。その瞬間が自身で感覚を研ぎ澄ませているのです。安全をお金で買う時代、四角い枠の中で育つ子どもたち、大人の管理無しでは遊べなくなってきている子どもたち、どこで感覚を研ぎ澄ますのか？ その前に大人たちが感覚を取り戻さなければなりません。本気で遊べ、大人たち。

負けるな、日本産カブトムシ。お前にはお金では買えない価値と夢がある。そして感覚を研ぎ澄ませてくれた恩がある。

連絡・問合せ ☎(45)6222

宝の山ふれあいの里ネイチャーセンター

開館時間：午前9時から午後4時まで

休館日：月曜日、祝日の翌日

防災ミニ情報

ライフラインを確保しよう

● 水は1日1人3リットルを目安に

大震災が起これると、ライフラインの寸断が予想されます。水道、電気、ガスの供給停止に備えて、真っ先に用意しておきたいのは「水」です。私たちは少々食べ物がなくても大丈夫ですが、水がなくては生きていけないからです。

災害時には給水車も回ってきませんが、地域により数日間を要することも考えられます。最初の3日間は自分自身で水を確保するという気持ちが大切です。

備蓄する飲料水の目安は、1日1人3リットルを基本に3日分程度、と言われています。例えば4人家族の場合、36リットルの水が必要です。市販のペットボトルをまとめ買いする時は、賞味期限に注意し、使いながら買い足していきましょう。また最近では、5年間保存できる飲料水も市販されています。

こうした飲料水とは別に、忘れてはならないのは、トイレや洗濯に使う生活水です。なかでも困るのが水洗トイレで、阪神淡路大震災や新潟中越地震でも深刻な問題になりました。そこでおすすめしたいのは、水の汲み置きです。風呂の残り湯は捨てずに、いつも水を張っておくよう習慣づけておくと、急場をしのごうができます。さらに、近くの小川や湧き水などを汲みに行くことも想定し、ポリタンクなども備えておくといいでしょう。